



同志社
歴史散歩
近江八幡

小野義夫

八幡山より街を望む

近江八幡市の今昔

天正十三年（一五八五）豊臣秀次が八幡山に築いた八幡城は、いまは城址のみがのこっている。岩を砕いて生きてきた老松の根が、苔むした石垣を支えている。山頂にただずんで琵琶湖上遥かに比叡、比良、伊吹と、鈴鹿連山一望の眺めは実に絶景である。この八幡山の南麓ぞいの古い街が、近江商人の発祥の地として知られている旧八幡町である。

しかし年と共に町の様子は大変変わったが、それでも昔ながらの黒ずんだ紅がら塗りの格子戸のある居宅と、白壁の土蔵とが建並んだ街筋ののこっていて、これが昔、遠く安南の地まで航行した豪商の住った町とは思えぬほど、静かなたたきである。

この八幡町が昭和三十年、隣接村落を合併して、一躍人口四万五千の近江八幡市が誕生した。そして八幡山にロープウェーが敷かれるなど確かに便利といえようが、かつて石垣を攀登って城址を訪ねたものには、いささか趣を欠いた感もある。しかし観光ブームの昨今だからこれもやむをえないにしても、鄙びた街筋に派手な鈴蘭灯が立並んだり、コンク

ートブロックの壁が出現するに至っては、これが市政への衣替えの姿かと皮肉りたくもなる。町はづれの水田には蛙が鳴いている。「市に蛙が……」なんて気にすることはなからう。東京都内でも猪さえ出るといいうのだから、天下に名高い江州米と縁の深い蛙だ。むしろじつくりと蛙の声を聞くのもよろう。

八幡の人々は代々金儲けが上手で、実業界に大物が沢山いる。私はこの八幡に産れ、ここで育った。そこである人は私にこういった。「せっかく八幡に産れながら、同志社に行って惜しいことをしたなあ」と慰めてくれた。

八幡の詳しい歴史は、近江蒲生志全十巻、江州商人、八幡史など、また面白く読める本として毎日新聞社編の江州人があるから、このくらいで割愛するが、八幡といえばヴォーリズ氏は余りにも有名である。

そこで近江兄弟社を訪ねて、いまなお印象深く記憶にのこっているエピソードを附記することにして（ヴォーリズ氏の人と事業などについては、近江の兄弟、あめにたから、湖畔の声などの出版物や、本誌八号には吉田希夫氏の執筆もある）。

八幡は世界を中心

滋賀大学の小牧学長は、「江州人」の刊頭の辞に「江州は日本のヘッダ」と書いてある。ヴォーリズ氏（ウィリアム・メレル・ヴォーリズ）は「八幡は世界を中心だ」といった。その訳を聞くと、コンパスの足を世界地図の八幡の中心において、一ぱいに円を描いた。そして「それ、ご覧なさい。八幡は世界の中心でしょう」という訳で、説明は至って簡単明瞭、だがこれは決して駄洒落だけではないかった。

「富める者が天国に入ること、ラクダが針の穴を通るよりも困難である」といわれているその富める者が、日本一多い金もち所、八幡にはるばる単身のり込んできた青年ヴォーリズ氏の心中には深く決するものがあつたに違いない。実に偉い人であつたと思う。

ヴォーリズ氏は明治三十八年来日、昨年八十四歳で亡くなるまで、六十年近くの日本の生涯、八幡以外に住まつたことはない。こうしてヴォーリズ氏が八幡を中心に、描いてきた円は立派で、また大きく成長した。

「サナトリウム開設のこと」「ある寺の

住職が結核になった。遂にこの僧侶はここから追放同様の態で、寺と別れ村を出て行った。そしてある日、ヴォーリズ氏を訪ねた。

ヴォーリズ氏は彼の身上にしみじみ同情して、彼の療養のためにと小さな家を建てて番人も添えた。しかし僧侶は遂に世を去った。

この痛ましい事実はヴォーリズ氏に非常なショックであつた。身は僧侶という聖職にありながらも、ひとたび結核に侵されたが最後、一切から見放されて孤独のまま遂に死んで行つた悲劇を、身近くに体験したヴォーリズ氏は、この事実を機関紙『マスタートードシード』に書いて、世界中の有志に送つた。こうして場所も僧侶の小屋のあつた北之庄に設立されたのが近江サナトリウムである」と、若い時に聞いたが、『近江の兄弟』を読むと多少相違の点もあるらしい。

ここ北之庄は八幡山の東麓、自然林の中にクリーム色の病棟が幾つか建ち並んでいる。安土、八幡の水郷を隔てて、安土城址が手近かに見える静かな眺めである。

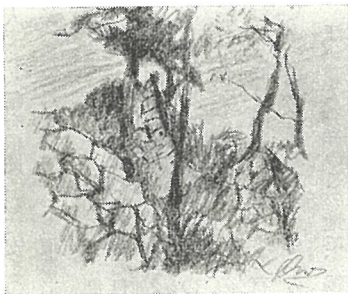
「ガリラヤ丸のこと」町から湖に通ずる水路八幡堀、これは八幡城の外濠であつた。ここを毎日ボンボンと丸い煙の輪を水面にのこ

してガリラヤ丸は堅田、今津、長浜と湖辺の町々へ福音伝道に出て行つたのである。ここにもいつも武田猪平牧師の姿を見た。こんな光景の記憶はなつかしいものだ。

夏休みになると同志社から下村泰介氏や、亡くなつた塚本義三氏らがやつてきて、ガリラヤ丸に乗るのを楽しみにしていた。これがきっかけになって、いまだに船に凝つてゐると下村氏はいう。それほどまでにガリラヤ丸の印象は深かつた。

同志社と八幡

近江の国、ことに湖南地方は早くからキリスト教の伝道が行われた地で、同志社創立間



八幡城址



八幡堀と西川甚五郎邸

もない頃から既に交渉があったようだ。

まず古
いところ
では、元
神戸教会
の牧師米
沢尚三、
八幡教会

の牧師須田忠明、宮川友之助、浜田乙磨、森山寅之助、大橋五男、宮森武次郎、田中金藏、村上太五平、武田猪男、高橋仰三郎の諸氏は同志社に学んだ八幡出身者、あるいは同志社に学んで八幡伝道に献身した人たちで、実業界では近江帆布の小森利兵衛氏（南大阪教会創立者の一人）も八幡出身であった。それから、大正初期頃になると同志社に学んだ学生の数も幾分増した。私もその一人であったから、その頃の幾人かを思い出して見よう。

まず高橋虔氏、同氏は現在同志社神学部教

授、ヘブル原典研究、特にわが国では数少ないアラム語の研究者として重きをなしている。また中村貢氏はその当時八幡商業に在学中であったが現在女子大教授、同志社理事として、最近問題の多い私学経営に活躍をしている。それから千貫清一郎氏と妹さん二人がいた。クリスチャン一家として先代は八幡教会設立の功労者、清一郎氏はもう七十に近いが最近まで滋賀県体育協会の初代理事、現在は県陸上協議協会の理事、校友会支部長と実に多忙ながらも健在。いま一人はFきく子さんで、誰かが「彼女は菊の花のようだ」といった。同志社在学中ずっと優等生で、英文科卒業後渡米した。ちよつとここで余談を挟むと、こんな彼女だったから当時の神学生たちから随分プロポーズされたが、いづれもデントン先生のお許しがなかったというから、先生の秘蔵の女性であったに違いない。一方、この頃、同志社から八幡を訪ねる人たちも多くあった。神学部の学生が盛んに往來して八幡の伝道を行った。上出雅孝、上野義一、安東（蓑田）長義、石川清、大島豊、丹羽巖、錦織貞夫、平田甫、藤原鉄長らの諸氏であった記憶がある。清水安三氏もその一

人で、八幡を根拠にして安土の伝道に熱心であった。ここでちよつと道草になるが、清水氏についてこんな話がある。

彼が天津の連隊にいたある日、教官が「戦争の目的は勝利にあり」と教えた。ところが清水氏は早速「教官殿、戦争の目的は平和にありです」と、抗議した。その後入隊した私はこの話を聞いた。おそらく有名な話として申し送りになっていたものらしい。

江州商人発祥のこの地に、種違いのキリスト教の一粒が播かれてからもう七八十年にもなるだろう。この間、八幡の文化は大きく育った。また先代の商業の地盤を継承して経済的にも大いに伸展したが、そこに同志社人の存在も無視できないといっても過言ではなからう。八幡から同志社へ。同志社から八幡へと持ち運んだ「一粒の麦」の一つ一つが、新しく市としての街創りの上に、更により成長を祈るのである。

筆を止めるに当って、同志社の校歌「ワンパーパス」の作詩者ヴォーリズ氏の心からなる敬意を表し、道草の多かった歴史散歩を終る。

（校友・同志社本部嘱託）